

粹に去る 生き方そのもの



1962年生まれ。北里大学客員教授、ワコーホールディングス社外取締役。著書に「引き算の美学」など。

まゆずみ
黛

まどかさん

俳人

だれにも引退は訪れませんが、だれもが花道を歩けるわけではありません。ましてや、周囲が付度して用意するものではないでしょう。

その道で良い仕事をされた職人。一筋に良い米をつくり続けた農家の方。顧客や部下に退職を惜しまれる会社員。有名無名に関係なく、人生で花を咲かせた人なら、花道はおのずと立ち現れてくるものです。地位を昇りつめた人でも自分ではつくない。花道には自制する力が必要です。

「花道を飾る」と言うときに、よく使われる言葉が「立つ鳥跡を濁さず」。去る時には見苦しくなくこの美学は、恥の文化の表れでしょう。惜しまれつつ、有終の美を飾る。潔さは、粹の神髄です。

奈良・平安時代の相撲節会では、東から出てくる力士が葵の花、西からの力士が夕顔の花を髪にかざしました。歌舞伎では、観客がひいきの役者にご祝儀、花を贈るために花道ができたとされています。花道には、役者と観客の

ダイアログ（対話）があり、双方が響き合って生まれる空間です。

日本には古来、桜と言えど、初花を待ち、花衣を仕立て、咲く前から散った後まで、移ろうすべての様を愛でる文化があります。歌舞伎の演目の多くは、仇討や心中など、武勇伝や悲話、人情話です。そこには日本人の美意識や哲学、情感、情趣、涙が集積されています。また、それを演じる役者も、代々名跡を継承すべく、子どものころから稽古を積みまします。ひいきはそれらの背景をすべてわかっ

ていて、役者が花道に立つ瞬間を心待ちにします。観客にも成熟が求められるのです。「花道を退る時の衣ずれの音がいい」と言った人がいます。かすかな衣ずれの音には、一抹の哀感さえ漂います。歩く側と惜しむ側。その

両方がそろわなければ、花道は成立しないのです。

花道に男が消えて冴返る

2001年、十代目坂東三

津五郎丈の襲名披露を拝見して詠んだ拙句です。花道から揚げ幕へと去っていく背中に、大名跡を継ぐ覚悟と威厳、孤独を感じました。まさに人生の花道にも通じます。最近、知人でもるもろの要職を自ら降りられた方がいます。「次の世代に道を譲らないといけない」と。引退とは、人を信頼し委ねることでもある。その深い「黙」に、人生の重みと華が集約されていて、傍らで見ている感動を覚えました。

外国語にも「花道」に相当する言葉はありますが、日本語はもっと情緒的です。「輝かしいキャリアの終わり」では言い尽くせない、言葉そのものが匂い立つような、上質な艶を帯びています。花道とは生き方そのもの。いかに美しく、粹に去るかは、いかに美しく、粹に生きるかです。

（聞き手・池田伸壹）